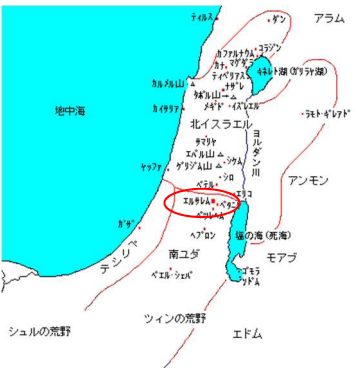


✠ ユダヤとイスラエルとヘブライの違い

<ユダヤ・イスラエル>

—紀元前—アブラハム（アブラム：称賛された父、高められた父。アブラハム《創世記 17：5》：多くの国民の父）は、ユダヤ人の父である。今から約 5000 年前の BC3000 頃に、主の召命により、アブラム（アブラハム）は「カルデアのウル（現在のイラク）」を出発して、父親の定住した「カナン」を経て「カナン」（現在のパレスチナ・イスラエル）に移住した（創世記 12 章～13 章）。アブラム（アブラハム）は、イシュマエルとイサクを生み、イサクはヤコブを生んだ。ヤコブ（創世記 32：29＝イスラエル：「神は闘う」「神と闘う」の意）に 12 人の息子が生まれ、モーセによるエジプト脱出の後、12 部族にそれぞれ土地が与えられた。ユダ（「ほめたたえる」の意で、ダビデ王の先祖）に与えられた土地が、後に「ユダヤ」と呼ばれるようになった。ベニヤミン族はユダ族に吸収されたため（列王記 12：21）、この 2 部族の土地がユダヤと呼ばれ、レビ部族は祭司職に就き、各部族の中に町を与えられていた。ソロモン王の死後、統一王国は「北イスラエル王国」と、「南ユダ王国」に分裂する（列王上 12 章）。北イスラエル王国は、サマリヤを首都に、南ユダ王国はエルサレム※を首都にした。BC722 に、北イスラエル王国（10 部族）がアッシリアに滅ぼされ（イスラエルの失われた 10 支族《部族》）、BC586 には南ユダ王国もバビロン（新バビロニアの首都がバビロンであるため、新バビロニアとする方が妥当だが、聖書表記がバビロンとなっているため、ここではバビロンとする。英語版聖書：Babylon）によって滅ぼされ、支配者階級は捕囚として連行された（バビロン捕囚）。BC539 に新バビロニアがアケメネス朝ペルシアのキュロス 2 世によって滅亡すると、ユダヤ人は解放されたため帰還して再びユダヤの地に定住した（イザヤ 44：24～28）。



「キュロス 2 世は、全世界を支配しているだけではなく、あらゆる人のために支配をしていると主張した。『お前たちを征服するのは、お前たちのためなのだ。』とペルシア人たちは言った。キュロスは隷属させた民族が彼を敬愛し、ペルシアの従属者であって幸運だと思いを望んでいた。自分の帝国の支配者下で暮らしている国民の称賛を得るために、キュロスが行った革新的な努力の最も有名な例を挙げると、彼はバビロンで捕囚となっていたユダヤ人が、ユダヤの故国に戻り、神殿を再建するのを許すように命じているが、その時、資金援助さえ申し出たのである。キュロスは自分がユダヤ人を支配しているペルシアの王だとは考えなかった。彼はユダヤ人たちの王でもあり、だからこそ、彼らの福祉に責任を持っていたのである。」

（ユヴァル・ノア・ハライ「サピエンス全史（上）」より）

※エルサレム（「平和の町」の意）は、もともとパレスチナの原住民エブス人の住む土地であった。

古代イスラエル・ユダ王国の首都で、エルサレム神殿がかつて存在した。また、イエス・キリストが処刑された地でもあり、ユダヤ教・キリスト教・イスラム教共通の聖地となっている。

—紀元後—イエス・キリストの時代には、エルサレム地方とサマリア地方のあるユダヤ属州や、別の属州に含まれたガリラヤ地方が、全てローマ帝国の支配下であった。ガリラヤは異邦人のガリラヤと呼ばれ、ユダヤからは低く見られていた。サマリア人も、イスラエルと他民族との混血であり、ユダヤ人から軽蔑されていた。



・AD66 に、ローマ帝国とローマのユダヤ属州に住むユダヤ人との間で行われた「第一次ユダヤ戦争」(AD66~AD74) が起こり、<AD70 年の「エルサレム攻囲戦」(エルサレム攻囲戦は、1099 年にもある) で、ユダヤはローマ帝国軍に滅ぼされ、ユダヤ人は、世界に離散 (ディアスポラ:「撒き散らされたもの」という意味のギリシャ語に由来する言葉で、元の国家や民族の居住地を離れて暮らす国民

や民族の集団ないしコミュニティ) した。>、また AD132 には、「ユダヤ属州」の反乱 (バル・コクバの乱、または第二次ユダヤ戦争) が起こった。結果、ユダヤ人は鎮圧されるが、これを機に、ローマ皇帝ハドリアヌスは、それまでのユダヤ属州名を廃し、「ユダの地 (ユダヤ)」ではなく、ユダヤ人の旧来の宿敵ペリシテ人 (Philistine) にちなんで、属州「シリア・パレスチナ (Syria Palaestina、注: 英語 Palestine、ラテン語 Palestina)」と改称し、ユダヤという名は消滅した。ローマとしては、何度も繰り返されるユダヤ民族の痕跡を完全に抹消するため、それより千年も昔に消滅した「ペリシテ民族」の名を引用したのである。これ以降、「パレスチナ」と呼ばれるようになった。同時に「エルサレム」をローマ風にするため、「アエリア・カピトリナ」と改称した。「パレスチナ」(Palestina、古称はカナンで、BC13 世紀頃にはイスラエル人が既に住んでいた) は「ペリシテ人の土地」という意味だが、実際には、「パレスチナ人」は、パレスチナ地方に居住するアラブ人を独立した民族として捉えた場合の呼称で、アラブ民族であり、「ペリシテ人」とはまったく関係がない。(参考: 難民とディアスポラの違いは、難民が元の居住地に帰還する可能性を含んでいるのに対し、ディアスポラは離散先での永住と定着を示唆している点にある。)

・また、古くから、「ユダヤ人」は地中海世界で「ギリシア人」と商業面で競合することが多く、迫害されることもあった。また、ローマ帝国においては、兵役に就かず唯一神以外は礼拝しない「ユダヤ人」は特異な存在と見なされた。

・離散した彼らは、中世キリスト教世界において卑しいこととされた金銭の貯蓄、卑しい仕事とされた金貸し (銀行) 業 (利子を取ることを禁じられていた) により生計を立てるようになった。当時、こうした禁忌の罪は煉獄 (カトリック教会の教義: この世の命の終わり天国との間に多くの人が経ると教えられる清めの期間) により浄化されると考えられていた。

・後に起こる、「イスラエルを再興しよう」という「シオニズム」(「シオンに帰ろう、父祖の地エレット・イスラエル、パレスチナに帰ろう」というイスラエルの地パレスチナに故郷を再建しようとする等のユダヤ人の近代的運動、関連: P. 40) は、ユダヤ系軍人への冤罪事件だった「ドレフュス事件」(1894 年にフランスで、フランス陸軍参謀本部勤務の大尉であったユダヤ人、アルフレド・ドレフュスがスパイ容疑で逮捕された冤罪事件) を取材していたオーストリア人記者テオドール・ヘルツルによって提唱 (ユダヤ人自らが国家を建設し諸外国に承認させる) された。そして 1897 年バ

ーゼルで第1回シオニスト会議を主宰し、後に、ヘルツルは建国の父といわれる。

・1917年にイギリス外相が「パレスチナにおけるユダヤ人居住地の建設とその支援」を約束した「バルフォア宣言」が出され、1947年に国連によるパレスチナ分割決議を経て、1948年5月14日に「**イスラエル国**」が建国され、ユダヤ国家が誕生した。

※イスラエル Israel（神に勝つ者）＝イシャラー（Isra《勝つ者》）＋エル el（神）



ドレフュス大尉の不名誉な除隊を描いた挿絵(官位剥奪式で剣を折られるドレフュス=左側)



イスラエル国旗



イスラエル国章

<ユダヤ人 (Jew) >

・ユダヤ人とは、「ユダヤ人の母から産まれた者、もしくはユダヤ教に改宗し他の宗教を一切信じない者 (ユダヤ教教徒)」というのが、本来の定義だった。ところが、1948年5月14日の「イスラエル独立宣言」(ユダヤ暦: 5708年イヤール5日にダヴィド・ベン=グリオンによってテルアビブで発せられた、中東のパレスチナにおけるユダヤ人国家「イスラエル」の建国宣言) から約2年後の1950年7月5日に制定された法律、「帰還法」(ユダヤ人にイスラエルに移民する権利を与え、すぐに国籍を付与するという法律) で、「ユダヤ人とはユダヤ人 (男女問わず) の息子、孫、ユダヤ人と結婚した者、あるいは改宗した者」と、1970年に改定 (ユダヤ教徒であるという条件はない) された。これは、旧ソ連に居住していたユダヤ人に帰還の道を開くために執られた措置で、これにより、ユダヤ人かどうかハッキリしなかった、数十万人の旧ソ連のユダヤ人が、イスラエルに移民できるようになった。

・エチオピアに、ソロモンとシバの女王の子孫として、聖地エルサレムへ帰還することを願って暮らしていた「ベタ・イスラエル Beta Israel」あるいは「ファラシャ」(ゲエズ語《古代の南方セム語》: 「流浪民」・「異邦人」) と呼ばれる黒人のユダヤ人の移民計画である「モーゼ作戦」(1984年、ファ

ラシャの救出作戦)と「ソロモン作戦」(1991年、ファラシャの救出作戦)も、帰還法に則ったもので、エチオピアのベタ・イスラエルの85%以上にあたる110,700人を越える人々が帰還法によってイスラエルに移住した。

・1950年以来、273万4245人以上の教徒がイスラエルに帰還し、帰還法で、ユダヤ人(孫を含む)のすべての子孫に国籍を付与するよう定義されたため、これまでに数十万人の非ユダヤ人も、イスラエルの市民権を得ている。

〔参考〕

- ・ユダヤ人社会内やイスラエル国内においては、「ユダヤ人の母を持つ者」をユダヤ人と呼ぶのに対し、ヨーロッパなどでは、母がユダヤ人でなくてもユダヤ人の血統を持った者(たとえば母がヨーロッパ人、父がユダヤ人など)もユダヤ人として扱うことが多い。
- ・近世以降ではキリスト教に改宗したユダヤ人も無神論者のユダヤ人も「ユダヤ人」と言うことが多い。なお、イスラエル国内において、ユダヤ教を信仰していない者は、「イスラエル人」である。
- ・古代イスラエル人またはユダヤ人の別称として「ヘブライ(《ユーフラテス》川の向こうから来た人の意)人」とも言われる。→最初にヘブライ人と呼ばれた人：ヘブライ人アブラム(創世記14:13)
- ・日本では、ユダヤ人を第二次世界大戦中までは「セム人」と呼んだ。
- ・世界のユダヤ人
 1. アシュケナジム(アシュケナージム、Ashkenazim)：ユダヤ系のディアスポラの内、ドイツ語圏や東欧諸国などに定住した人々、およびその子孫(鉤鼻に特徴がある世界のユダヤ人の最も大きな集団)を指す。語源は創世記10章3節ならびに歴代誌上1章6節に登場するアシュケナズ(新共同訳、口語訳：アシケナズ)である。
 2. セファルディム(Sephardim)：ユダヤ系のディアスポラの内、主にスペイン・ポルトガルまたはイタリア、トルコなどの南欧諸国に15世紀前後に定住したユダヤ人を指す。語源はオバデヤ書20節の地名、セファラド(Sepharad)である。
 3. ミズラヒム(Mizrachim)：主に中東・カフカス以東に住むユダヤ人。ミズラハ Mizrach とはヘブライ語で「東」の意。
 4. クルド地方のユダヤ人、グルジア・ユダヤ人、山岳ユダヤ人、インドのユダヤ人、ブハラ・ユダヤ人、中国のユダヤ人(開封のユダヤ人：中華人民共和国河南省開封市に数百年間存在したユダヤ教徒のコミュニティ)など。

<ヘブライ(ヘブライ語)>

ヘブル語、ヒブル語は、アフロ・アジア語族(アラビア半島を中心とする西アジアで話されるセム語派と、それに近縁な、北アフリカを中心に分布するハム諸語《かつてのハム語派》の総称、ヘブライ：《ユーフラテス》川の向こうから来た人の意)のセム語派に分類される言語で、漢字表記は「希伯来語」。ヘブライ語には、古代にパレスチナに住んでいたヘブライ人(ユダヤ人)が母語として用いていた古典ヘブライ語(または聖書ヘブライ語)と、現在イスラエル国で話される現代ヘブライ語とがある。現代ヘブライ語はヘブライ語で「イヴリット(イヴリット)」と呼ばれ、古代の聖書へ

ブライ語は「聖なる言葉」すなわち「神の言語」という名前で知られていた。

古典ヘブライ語はユダヤ人が世界離散（ディアスポラ）したところから次第に話されなくなり、後の時代の離散ユダヤ人は、かわってアラビア語（アフロ・アジア語族のセム語派に属する言語）・ラディーノ語（イタリア・バルカン半島・中東などに住む、スペイン系ユダヤ教徒・セファルディムのスペイン語方言と位置づけられる言語）・イディッシュ語（インド・ヨーロッパ語族ゲルマン語派のうち西ゲルマン語群に属する高地ドイツ語（標準ドイツ語）の一つで、世界中で 400 万人のアシュケナージ系・ユダヤ人によって使用されている）などの諸言語を日常的に用いた。そのためヘブライ語は二千数百年の間、ユダヤ教の言葉としてヘブライ語聖書やミシュナー（ユダヤ教指導者・ラビ群のトーラー《ユダヤ教の聖書の「モーセ五書」のこと、またそれに関する注釈も加えてユダヤ教の教え全体を指す》に関する註解や議論）などの研究・儀式・祈り、別々の言語を話す遠隔のユダヤ人共同体同士がコミュニケーションを取る場合などに使われるのみであった。しかし、20 世紀にヘブライ語が現代ヘブライ語として再生され、他の言語に替わってイスラエル国に居住するユダヤ人の日常語の地位を占めるようになって現在に至っている。

この言語の一般的な名称として使われているヘブライの名は、ユーフラテス川を越えて移住する人たちのことを総称してヘブル人と呼んでいたことに由来する。今から約 5000 年前の BC3000 頃にカルデアのウル（現在のイラク）からカナン（現在のパレスチナ・イスラエル）に移住したとされるアブラハム一族と、その子孫である人々が他称としてヘブル人、ヘブライ人などと呼ばれるようになり、彼らが使う言語がヘブル語、ヘブライ語と呼ばれた。

特徴としてアラビア語と同様に、この言語は文章で書くときは右から左に書く。またヘブライ文字はアラム文字に由来するため、日本語や英語などと違って、子音を表す表記はあっても、母音を表す表記はないことが多く、言語の習得にはある程度の慣れが必要である。

ネクダー（ヘブライ文字の上下に記される記号で、母音や読み方が 2 通りある文字の区別を表す）と呼ばれる母音記号があるが、日本語で出版されているヘブライ語の文法書や語学書や辞書など、言語習得のための初等教科書や発音のわからない外来語の表記の際に使われるだけであり、文章を読んだり書いたりする際に使われる機会は少ない。ただ、イスラエル国でも詩やシャアル・ラマトヒール（1956 年に創刊されたイスラエルの新聞で、ヘブライ語のレベルは初級程度だが、記事はイスラエル政治や中東和平など高等教育を受けた成人を対象としている）にはネクダーが付されている。

ユダヤ人言語学者ヨセフ・アイデルバーグは著書において「日本語はヘブライ語と類似した単語が優に 3000 語を超えて存在している」と語っており、カタカナとヘブライ文字の共通性にも注目している。